

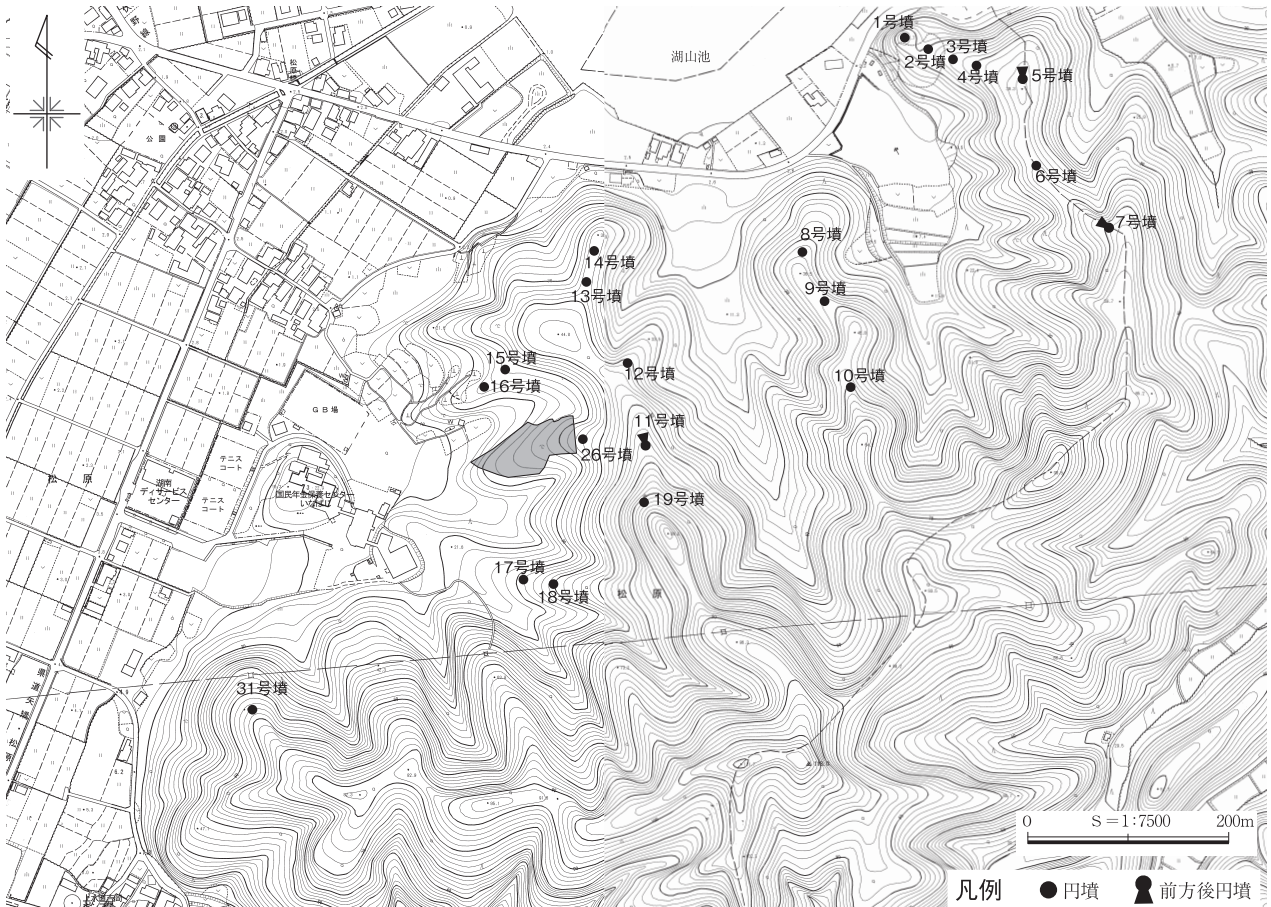
第3章 調査の成果

第1節 松原古墳群の概要

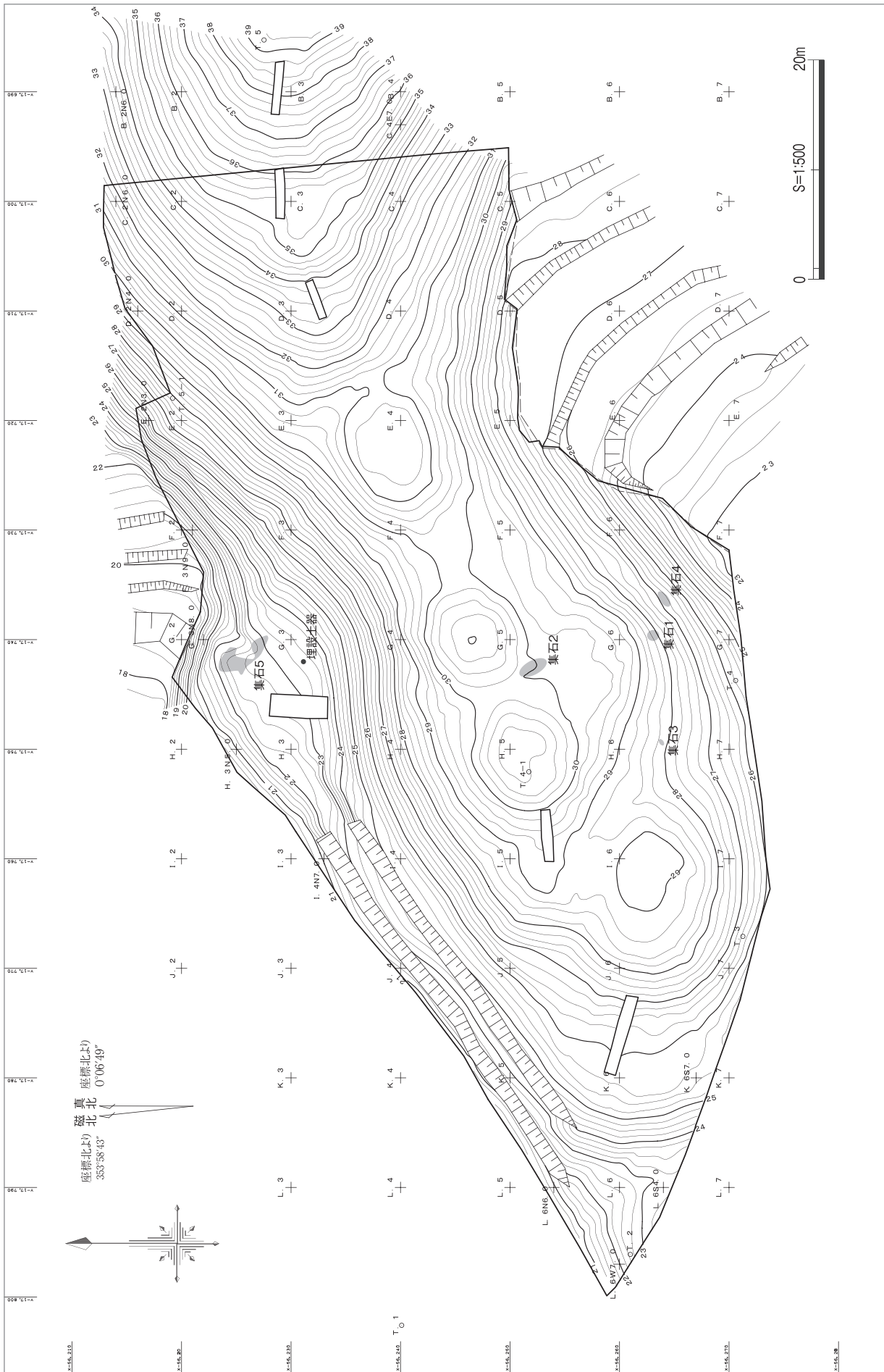
1 松原古墳群の概要(第3図)

松原古墳群は、鳥取市松原地内に所在し、標高21～36mの丘陵上に展開する古墳群である。この丘陵は、中国山地から鳥取平野へ延びるもののうち標高297mの「箕上山」を頂として北へ延びるもので、西に吉岡温泉町を望みながら湖山池まで続く。湖山池に面した同一丘陵上には、松原古墳群のほか、高住古墳群(図2:111)、良田古墳群(115)、吉岡川を挟んだ独立丘陵上には吉岡古墳群(120)が形成され、湖山川左岸の丘陵上には大畑古墳群(124)、大谷古墳群(125)、岩本古墳群(126)などがそれぞれ立地する。また、松原古墳群の西側に隣接する低丘陵上に古墳時代前～中期の集落である松原谷田遺跡(116)がある。このように湖山池を望む丘陵上には数多くの古墳が築かれており、松原古墳群もその一角を占める。調査前の松原古墳群が立地する丘陵は檜などの植林、松や竹などの雑木林であり、遺跡周辺には現代の墓地なども散見される。

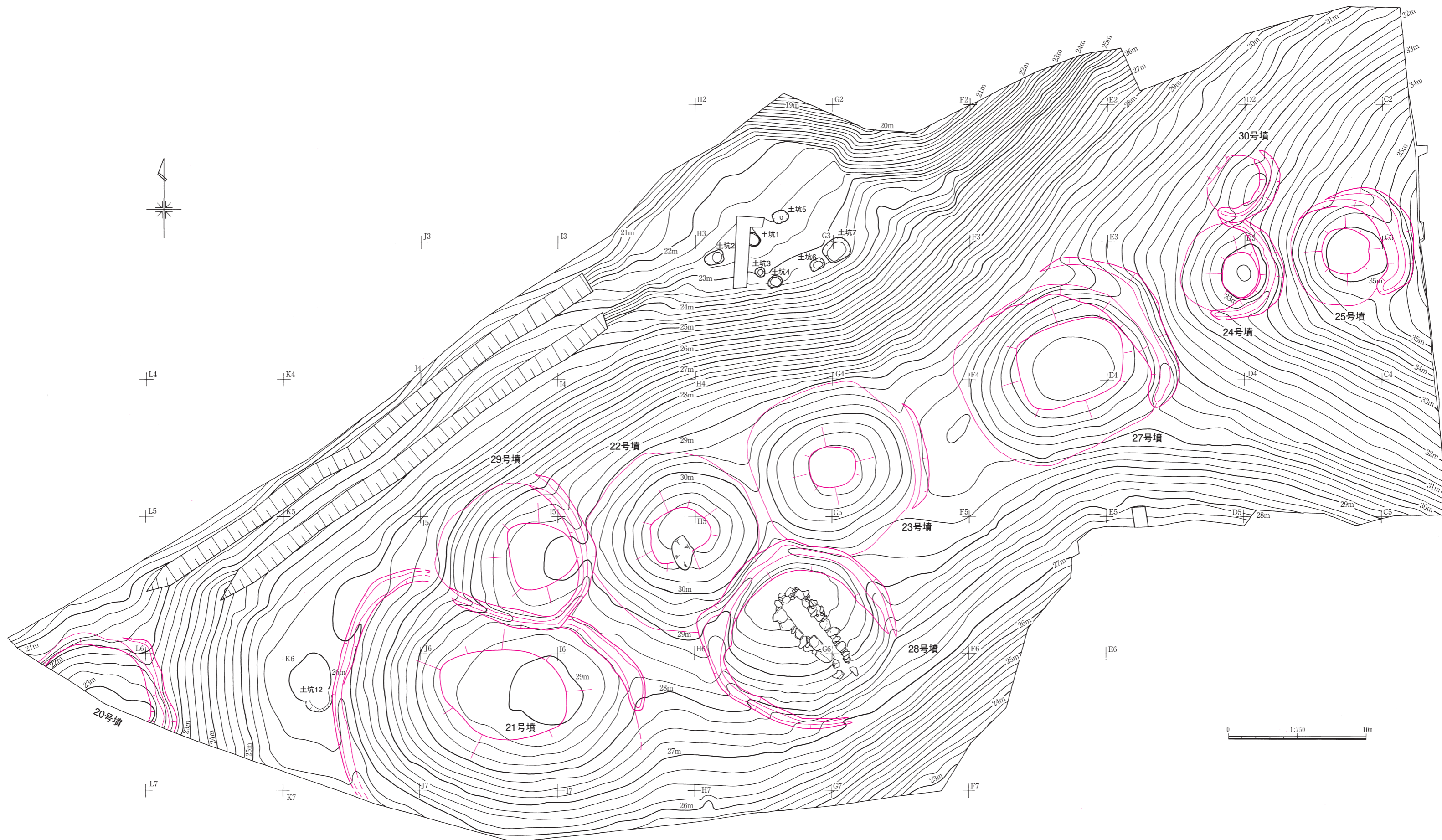
松原古墳群は、吉岡温泉町から北東へ約700m、標高89mの松原展望台を頂部として北から西に向かって下る標高20～60mの数条の尾根筋に東西約750m、南北約550mの範囲で展開する。その数は、これまで29基と数えられてきたが、今回の調査によって新たに2基発見されたことから平成21年3月段階で31基を数える。「前方後円墳集成」では、未調査の松原5・7・11号墳の3基が前方後円(方)墳と記載され、このうち今年度調査地と同一尾根上に立地する11号墳は、全長27.5mとされる^(註)。尾根筋には小規模な円墳・方墳が点在しており、今後の踏査や発掘調査によってさらに増加する可能性が



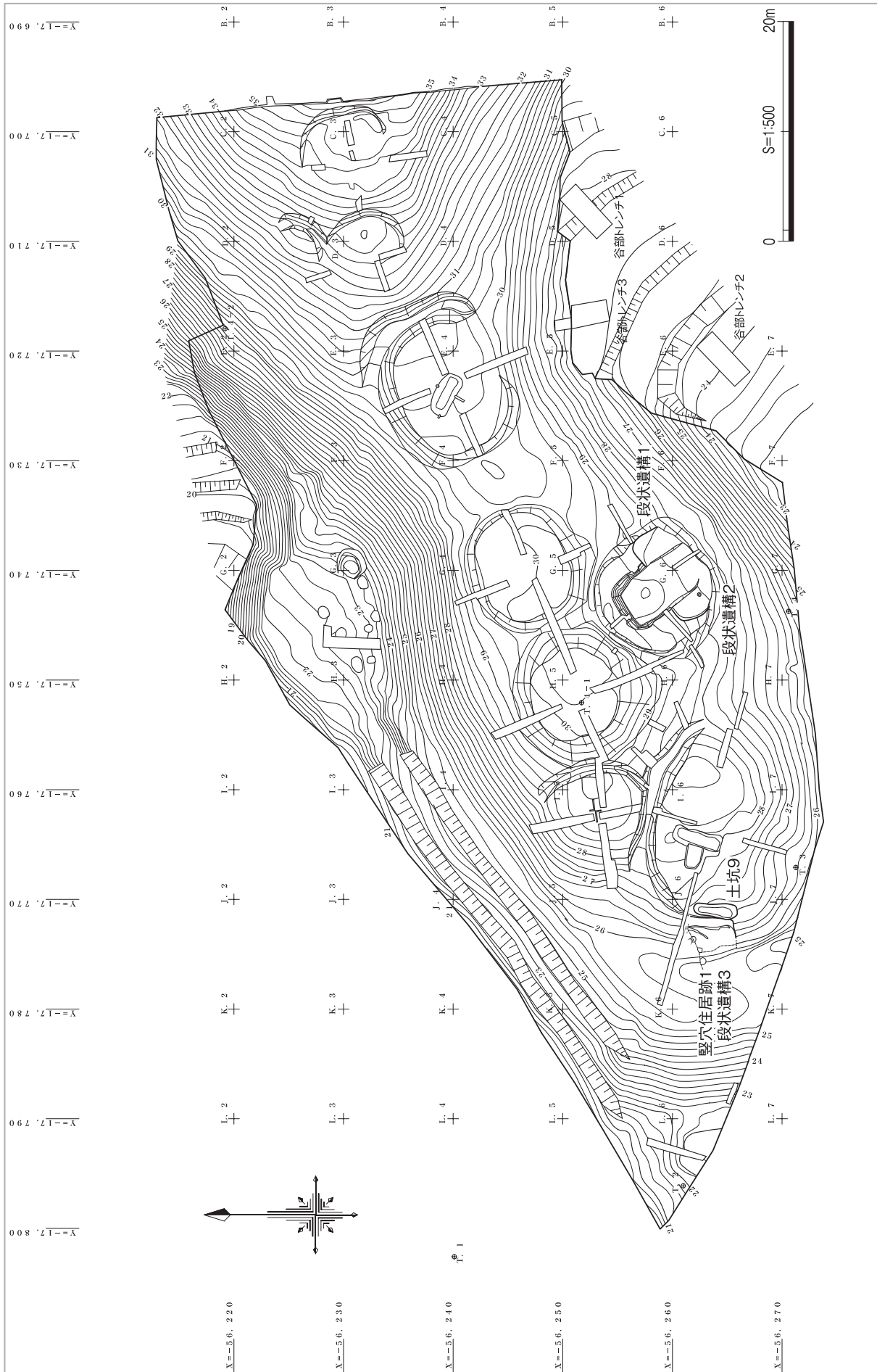
第3図 松原古墳群と調査地の位置



第4図 調査前地形測量図



第5図 古墳配置図



第6図 調査後地形形測量図

ある。

2 平成20年度の調査(第4～6図)

今年度の調査は、当初、松原古墳群の西端、松原展望台を頂部として西へ延びる尾根上の一支群を形成する松原20～25・27・28号墳の計8基の古墳を対象としたが、その後調査中に新たに検出した古墳2基を加え、計10基の調査を実施した。このうち主体部が調査地外となり、墳丘端部の調査に留まった20号墳、盛土・主体部が流出している29号墳は時期不明であるが、それ以外の8基は古墳時代後期に築造されたものと考えられる。墳形は、21・27号墳が方墳または楕円墳、20・22～25・28～30号墳は円墳であり、埋葬施設は28号墳が横穴式石室、25・27号墳が木棺直葬、その他は明瞭な木棺痕跡を見出せなかった。墳丘の切り合い関係や主体部の副葬品などから、本調査地では、まず尾根に古墳が築かれ、その後尾根部の古墳に割り込むように21号墳・28号墳が構築されることが確認された。主に埋葬施設や墳丘から須恵器の蓋坏・坏身・高坏・甕・壺・甗・提瓶、土師器の甕・脚付碗・高坏、鉄刀、鉄鏃、刀子、玉類などが出土した。

その他の遺構として、古墳時代の竪穴住居跡1棟と段状遺構3基、集石5基、土坑12基、埋設土器1ヶ所が確認された。このうち、28号墳の石室石材を利用した集石4基と土坑8基は中世墓と推定され、湖山池沿岸で顕著にみられる中世墓の特徴と一致する。備前焼を利用した埋設土器も中世墓と考えられる。調査地北側のテラス部では、このように土坑群と石塔が密集した中世から近世の墓域として利用された場である。

(註)近藤義郎編1991『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

第2節 遺跡の立地と層序

1 立地(第3～6図)

湖山池南岸の低丘陵地帯は、大小の丘陵が樹枝状に細かく分岐する複雑な地形を形成している。

松原古墳群の所在する丘陵はこうした丘陵群の西端部にあり、その西側は狭い沖積平野に面している。この丘陵は、調査地の南東約400mに位置する標高118mの頂部から5方向に延びる主丘陵をもち、松原古墳群(1～31号墳)は西および北～北東に延びる4つの主丘陵とそこから派生する支丘陵上に展開している。本調査地は、北側に延びる主丘陵から西に派生した小丘陵上に位置する。

今回調査した松原20～25・27～30号墳は、いずれもこの小丘陵の鞍部に立地している。小丘陵は、鞍部幅が調査地内で10～20mと極めて狭小で、標高が調査地東端の最高点で約36m、調査地西端の最低点で約21mと丘陵付け根側と先端側での比高差も大きい。調査地内の地形を細かく見ると、Eライン付近を境に東西の傾斜度が変化している。この東側は尾根鞍部に平坦面がなく、東西の傾斜も急になるのに対し、西側は古墳と古墳の間に平坦地が見られ、東西の傾斜も古墳墳丘面を除けば非常に緩やかである。さらにJラインの西からも傾斜が大きく変化しているが、これは古墳築造などの人為的な地形改変の結果であった可能性が高い。

丘陵の北側斜面には狭いテラス地形が見られ、標高22～23mで平坦面を形成している。この平坦面では中世墓群と考えられる遺構群が確認されていることから、その形成に人為的な掘削が伴った可能性を想定させるが、この地形の成因については解明できなかった。また、北側斜面には犬走り状の段切りが見られたが、流土の堆積が見られなかったことから近年の掘削によるものと判断した。